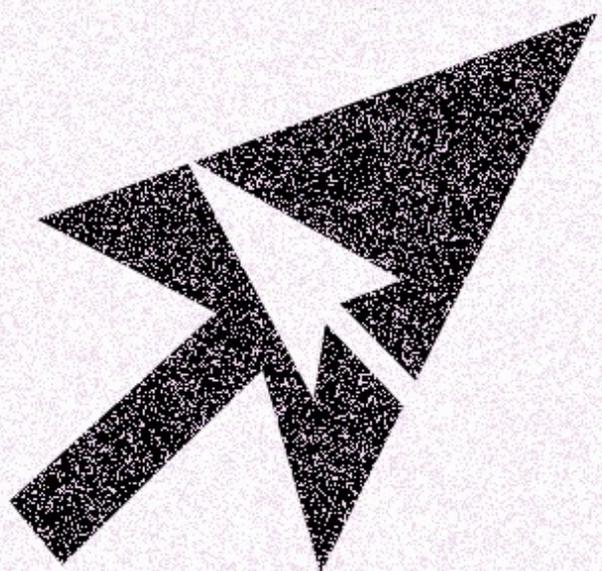


真命のな

ウツク



真命

致命的なクリック

さて、待ちに待った週末である。月曜日から金曜日の朝8時から午後6時まで働いて働いて働いて、ようやくきた土曜日である。

秋野利雄は普段なら6時過ぎに家をでなければならないのだが、土曜日の今日は8時過ぎまで眠ることができる。だから彼はゆっくりと二度寝をしていた。階下から妻と娘たちの会話が夢うつつのなか、聞こえた気がした。

「お父さんは？」

「まだ寝てるー」

「いいじゃない別に寝かしといてあげたら」

「「それもそうだね」」

8時過ぎ。ようやく起きた利雄はリビングの机の上に置手紙を見つける。

〈おとうさんへ

3人でショッピングに行ってきたーす

お昼ごはんは冷蔵庫に昨日のカレーがあるから食べてください

夕方には戻ります

倫&良子&理乃より〉

妻と娘の三人はまるで友達のようによく遊びに行ったりしている。その中に自分がいないことを利雄はなんとも思っていない。べ、べつに寂しくなんかねえよ。

とりあえず、朝食にトーストと目玉焼きを焼いてもそもそと一人で食べた。それからごろりとソファに横になる。と、猫のひつじがお腹の上に飛び乗ってきた。

「おふうっ」

危うく目玉焼きが飛び出そうになるのを寸でのところで押さえた。ひつじは利雄の苦しさを知らず、そのままごろんと腹の上で気持ち良さそうにごろんと横になった。確かに自分の腹の上で眠れるのだったらとても気持ちが良いだろうと利雄は思った。ぷよぷよのぼよぼよという擬音がこれ以上ないくらいじっくりとくるお腹だった。ひつじはぐるぐるとのどを鳴らしている。

ひつじは二年ほど前に秋野家にやって来た。保健所から貰って来た猫だった。保健所では犬や猫の里親を募集していた。一匹だけケージの隅っこでふてくされたような顔をしていたのがひつじだった。利雄はどちらかという犬のほうが良いんじゃないか思っていた。犬の方が懐くと云うし。そう言ったら理乃が反対した。噛まれる。怖い。嫌。倫も同じ意見だった。良子はどちらもかわいすぎて選べないと言っていた。結局、多数決で猫になった。理乃があの子がいいと言った。それがふわふわの白い毛の子猫だった。

猫なのにひつじ。

名前を決める家族会議は難航した。白い猫だったために、シロという名前が最有力候補だったが、いまいち決め手に欠けていた。良子はどこからどう見ても白い猫なのに敢えてクロという名前を推していたが、三人で却下した。会議が一時間にまで及び決まらず、倫と激しい言い合いになったから少し休憩しようかと利雄が提案しようとしたとき。

それまでおとなしく理乃に抱かれていた子猫が大きく口を開けた。

「めえー！」と鳴いたのだ。

その瞬間、皆で笑った。それと同時に名前は決まった。

ところで普段の利雄ならパソコンはシャットダウンしておくのだが、この日は仕事のまとめを少しやらなくてはならなかったのでスリープモードで放っておいた。夕方になりショッピングから帰って来た三人が、利雄にお土産をくれた。新しいネクタイである。嬉しかった。珍しいなと思ってそのことを告げたら、三人は含み笑いをしている。

「何か他に買った？」

尋ねながらも利雄はうすうす気が付いていた。高価いものを買ったのだろうと。でなければ、何の記念日でもない日に利雄にお土産など買ってくるはずもない。少しばつの悪そうな顔をして倫は背中に隠し持っていたかばんを見せた。

「買っちゃった。えへ」

一瞬でも可愛いと思ってしまうあたり、自分はまだ恋をしているのだろう。いつもいつもこの笑顔に騙されてきたように思う。しかし、金額を聞いて百年の恋も醒める。

「さんまんえんだよ」と理乃が無邪気に笑った。

利雄のひと月のお小遣いと同じ値段だった。

夕食はサバの煮付けとみそ汁に白米、ほうれんそうのおひたしと朝食のような夕食だった。四人でテレビを見ながら食べる。三人が買い物話をして、利雄は楽しく聞いていた。利雄は思い切りくしゃみをしてひつじが怯えていたという話をした。理乃はそれを聞き、少し怒っていた。理乃はひつじが大好きだからである。

夕食後、倫がパソコンを使おうとしている。どうやら良子が教えるようだ。利雄は、ふうんと眺めていたが、恐ろしいことに気がついた。「覗き見防止ちゅう」が作動していない。さきほどパソコンを使って一時的に動作を停止したままだった。利雄は真っ青になる。しかし、時すでに遅し。不幸中の幸いと言えば理乃がお風呂に入っていたことだろう。これは本当に助かったと思う。ただ良子には汚物を見るような目で見られることになるのだが。

このとき、利雄はパソコンのあるリビングでテレビを見ていたが、内容なんて頭に入らず音も聞こえなかった。走馬灯が頭の中を走る。時間がスローモーションで流れる。しかし、時間を止めることはできない。

ついに倫によって致命的なクリックがなされた。

その後、倫とはけんかになったし、良子はひと月も口をきいてくれなかった。

ただパソコンが没収されなかったので無理やりにでもこれでよかったんだと自分に言い聞かせる利雄であった。